
せつなのはざま！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せつなのはざま！

【Nコード】

N4746C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

『次元切断流』の使い手は必ず、大きな仕事をしなければいけない。しかし、主人公の仕事は彼としてはうれしいのだが、実際はあまりよいことではなかった！

一、白衣が似合う男？

一、

とある世界・・・人と人以外のものが共存する世界・・・まあ、今のところは人が主導権を握っているのだが・・・そういう世界が存在していた。しかし、人間といってもただの人間ではなく、変わった力を持つ人たちのほうが多かったのだが・・・

今年で既に十七歳の青年といつていい人物が白衣を翻してとある学校に侵入しようとする。しかし、校門の前には二人のガードマンがいて、職務を全うすべくこの不審人物の前に立ちふさがる。

「すみませんが、通していただけませんか？」

「いえ、それはなりません。ここは扱い上女子高ですので・・・」

「ああ、そうでしたね。すみません、ここの学園長先生の紹介状です。この学園に入るのは初めてですので、よければ案内してくれませんか？」

「・・・確かに、そのようですな。すみません。」

「いえ、職務上しやうがないことです。以前、この学園にも変態が侵入したと聞きましたからね。これからもがんばってください。」

「そういつてもらえると気が楽です。」

何事も無かったかのようにガードマンの後をその青年がついていく。時間帯がまだ食事前で授業があっているのか知らないが、その女子高からは元気そうな声なんかは聞こえてこなかった。

他の学園や高校とは一線を引く存在のこの学園に男子は入ることが出来ない。

以前は共学制だったのだが、さまざまな問題をへて、今では女子のみの入学が定められていた。その結果、近隣の共学制高校の女子は大体がこの学園に来たのである。彼女持ちは別に構わないのだが、彼女がいらない連中はちょっと危ないサイトに彼女を募集しようかと

いう状況になりつつあった。まあ、ちょっとしたことなので省くでしょう。

「……ここです。」

「案内、ありがとうございました。」

「いえ、これも仕事ですので……帰りは他のものが？」

「いいですよ、僕……いえ、私は学園長の孫ですので……いっしょに帰ります。」

そういうとガードマンは頭を慌てて下げたのであった。

「それは失礼しました！至らぬことを……」

「いいです、紹介状を見せなかった私がいけなかったんですから……じゃ、私は時間がないので……。」

そういつて彼は学園長室へとはいつていったのであった。この学園長室の前を通る生徒は一人もいない。ここの廊下を通るならばわざわざ別の場所を通る生徒のほうが多いからである。ここの学園長先生は恐ろしいことで評判で、敵にまわせば卒業までいいことがないのである。一説では、龍の神様だとかそうではないだとか……「ばあちゃん、頼まれたとおり、来たよ？」

そんな化け物婆……失敬、とても権力のあるおばあさまに話しかける主人公、狭間^{はざま}雪那^{せつな}。ゆきなと呼ばれてしまうこともあるが、それはしょうがないことである。

「おお、ようやくきたのかい？ばあちゃん、遅くて腰がまがったぞ。」

見るからに健康そうなおばあさんは自分の孫をじろじろと眺めていたのであった。おばあさんは雪那と同じように白衣をまとって目を細めたのであった。

「……この前あったときよりはまともな顔つきになっているけど……まあ、それはいい。お前さんにチャンスをやる機会がようやく訪れた。」

そういつて年代もののぼろぼろのソファに座るおばあさんに対して立ったままの雪那は首をかしげる。

「え？手紙には忘れ物を取ってきて欲しいって……。」
そういつて書類を取り出す。

「まあ、座ってその書類を開けてみなさい。」

孫が座り、書類の確認をしていると同時におばあさんはしゃべりだす。

「……私らの一族が『次元切断流』の使い手であることは知ってるはずだよねえ。これもお前の親父から聞いただろうけど、使い手が基本的に大人の仲間になるためにするべきことは……一つの大きな仕事を達成することだ。それで、人のいいばあちゃんは可愛いお前のためにこの仕事を用意してやったんだよ。」

書類に書かれていたことに少年は非常に驚く。それには『初めての女子高にドキドキ！？』僕、鼻血出ちゃうかも！』と題うった意味不明な冊子が出てきたからである。

「……ばあちゃん、冗談を聞きに来たんじゃないんだけど……僕さ、これから学校に行かないと……それに、ここは学園じゃないの？」

学校を前立てにして愛想笑いを浮かべながら雪那は自分の祖母にやんわりとこの意味不明な仕事をやりたくないと伝えようとしたのだが……

「たわけが！おぬしなぞ、一刀の元に切り捨て、サメの餌にしてやつても構わんだぞ！近頃、海水浴場ではサメが出没しているそうじゃないか！そこにいつてサメの餌のようにぶつ切りにされたいのかい？」

そういつて叱られる始末であつた。とてもデンジャラスなおばあさんである。

「……わかつたよ。題名がふざけているだけっていうことだろうから……それで、僕の仕事は？」

「簡単じゃ。この学園を守ること……それだけで許そう。」

「いや、許そうって……さっき、人がよさそうなガードマンが二人もいましたよ？それでいいじゃないんですか……って冗談です。」

ちょっとしたジョークです。」

いつの間にか自分の首筋には何でも切れそうな居合刀がひっついていたのであった。流れる汗に緊張がほとばしる。

「……次は無いぞい？」

「りよ、了解……」

両手をあげて降参をしめし、あきらめるようにして彼はため息をついたのであった。

「さて、本日から仕事をしてもらうぞ。」

「……あの、僕の学校は？」

「大丈夫、単位はきちんとやるように言っておく。さ、今から仕事開始じゃ！」

ここが女子高だということを本当にこのばあさんはわかっているのだろうか？と心のそこで思いながら雪那は尋ねたのであった。

「……男の僕がここにいたら毎回毎回、捕まってしまうよ。」

「ばかちゃん！そのために私らの一族は次元を切ることが出来るのだから！空間をも切り裂く能力……それさえあれば、覗きをしようが何しようが、顔を見られる前に指でこのように……」

おばあさんは人差し指でちよつとだけ空間を風いだ……それだけなのに、元からそこにあつたかのように闇の空間が広がる。

「……逃げ道だつて作成可能！この能力、おぬしのほうが得意じやろつに！もう、何も話はきかん！それに、女子たちと同じ場所じや。よろこべ！夕食時になったら帰って来い。」

そういつておばあさんは再び指で空間を風ぐとその隙間に入り、どこかに消えてしまったのであった。

「……はあ、ばあちゃん……本当に人間なのかな？僕、本当なのか不安になってきたよ……」

そういつて、とてつもなく弱そうな少年は自分の祖母に畏怖するのであった。しかし、震えているだけではいつか、食べられてしまふかもしれない。そんなことを考えた少年はソファから立ち上がる。

「……とりあえず、体がくつついているんだから……切り落とされる前に警備でもするかな？」

そういつて彼も空間を指で凧いでその場からいなくなったのであった。

彼が警備を始めて一時間経った。学校内部はガードマンの人在るから大丈夫だろうと思つた彼は学園の外を散歩することにした。そして、心の中で自分の祖母の愚痴を言う。

「……ちえ、ばあちゃん……僕だけのけ者なんて……他の人は『名のある竜を自分の刀だけで倒せ』とか『伝説の秘宝を手に入れる』とか……ファンタジーなことを要求するのに、僕の時だけなんで『女子高の警備をしろ』なんだろう？ 予想していたのと全然違うよ……。」

愚痴つてもしょうがないのでそこら辺でやめる。そろそろお昼のようだ。

「……そういえば、母さんからお金、貰ったんだっとな。」

どこで何を食べようかと考えていると目の前に祖母が現れたのであった。

「……うわっ！」

「ほほう、お前は……何時の間に学園の外に出たんだい？ お前がそんなだから学園がのつとられるんだ。」

「え？」

我が耳を疑い、雪那は口を閉められないでいた。

「全く、余興のためにこの冗談を仕組んでいたのにねえ。てつきりもうちょっと真面目にしてくれるだろうと思つたんだが……まあ、それはいいや。とりあえず、今から学校を占領した輩を成敗して来い。成敗する方法は自由……じゃ、私は見てるからね。」

そういつて彼女はいなくなったのであった。

「……僕のせいだって？」

ため息をついて彼は再び空間を凧いだのであった。

校内にある数少ない男子トイレ……そこで、一人の覆面が用をたしていた。彼らは人外の者で……巷で噂になっている犯罪グループでもあった。

「……ま、今回も楽勝だったな。所詮は女子高だ。三人のほうが何かと動きやすいんだよな。」

ここの学校の規則が厳しいこと、男性は許可がなければいけないこと、更に……今日は学園長がいつもいる部屋にいなかったということで彼らは犯行……この市を治めている市長の娘の誘拐を目論んでいたのであった。わざと派手にやったのは目立つためであり、彼らは正々堂々としたことが好きだったのだ。まあ、誘拐が正々堂々にはいるかわからないのだが……いや、実際のところは卑怯に違いないだろう。

「さて、と……そろそろ戻るかね？他の教室の人も気づいているころあいだろうからねって……」

そういつていた犯人の一角がめつたに掃除されない男子トイレの埃積もった床に倒れたのであった。その後ろからは上体のみを出している雪那がいたのだった。

「やれやれと……峰打ちだから許してね？」

そういつてどこからかロープを取り出してその人物を縛り上げ、人目に付くような場所に転がしておく。無論、既に警察には知らせしており、時間の問題だろうが……。

「……後二人か……」

そういつて彼は再び闇の空間の中に消えたのであった。

「おとなしくしやがれ！黙っておけばこの娘以外には手をださないからな！！全員、あっちを向いて床にうつぶせにしてな！ほら、葛籠も動かないようにしてな。」

一人の覆面が（因みに、覆面は額に肉とかかかっていたりもする。）縄でぐるぐるまきにされている女子生徒を掴んでいたのであった。

掴まれている女子生徒は震えており、他の生徒たちも既にロープでぐるぐる巻きにされていたのであった。動けるものは犯人以外、その場所にはいなかった・・・はずであったが・・・。

「・・・うがつー！」

唐突にそんな叫び声をあげて犯人は崩れ落ち、ロープでぐるぐる巻きにされている女子生徒、葛籠くわろう 氷ひょうは解放されたのであった。

「え？」

困惑する女子生徒だったが、自分が解放されたことによろしく気づき、なおかつ犯人が少量の血を出しながら倒れており、おまけに気絶していることに気がついたのだろう・・・慌てて携帯電話を取り出して警察を呼んだのであった。

「・・・遅いな・・・。」

逃げるために用意されていた車の中で最後の犯人は犯行終了予定時刻を過ぎても戻ってこない二人の不甲斐ない犯人に対して憤りを感じていた。

「・・・五分前には大体、仕事が終わっていないといけないんだぞ？そんなことも出来ない奴が犯罪を起こせるかってんだ。犯罪の世界でも頭が悪い奴は生きてはいけないんだ！」

持論を展開している彼にも魔の手が忍び寄っていたのであった。

当然のように彼は気がつかない。

「もう、この仕事を最後にあいつらとは縁を切ろう！俺は今度からソロで生きていく！」

それならばもうちょっと早く縁を切るべきでしたねと心の中で呟いて雪那はその男を切り捨てたのであった。

学園の前にはパトカーが何台も止まり、父兄の方々の姿も見える。監禁されていた教室の女子生徒たちも人質となっていた女子生徒に解放されて誰一人として怪我をしてなかったそうだ。因みに、犯人たちは首辺りに殴られたような形跡・・・一部、神経が麻痺していた

り、背中が斜めに切られていたそうだった。

女子生徒はモザイクをかけられてテレビ取材を受けていた。

「あゝえゝゝゝ気がついたら、ナイフが床に落ちててゝゝゝいつの間にかロープも取れててゝゝゝそのナイフを使って皆を助けました。」

犯人の前での勇気ある行動として彼女は一躍学園の中でヒーローとして迎えられていたのだがゝゝゝもう一人、ナイフを必要としている人がいた。いや、ナイフよりも鑢のほうが必要かもしれない。「た、助けて！ばあちゃん！僕はよくやったほうだよ！」

「はん！何がだい？それだけですんでありがたいと思って欲しいくらいだよ。本当。」

鎖でぐるぐるにされている雪那の目の前でおばあさんはほっぺたが落ちそうなくらいのステーキを優雅に食べていなさったのであった。空腹の彼には拷問である。

そして、彼に食事が与えられたのは五時間後だったそうだった。

一、白衣が似合う男？（後書き）

えっと、そうですね・・・連載第一回目ですので、何からはなしていいことやら・・・ほかの作品との掛け持ちですので、どうかおもいました、連載することになりました。これまで漢字を題名によく使ってましたが、ひらがなもいいのではないかと思ったので、題名がすべて漢字です。基本的にコメディーにしていきたいとおもいますので、これからよろしくお願いします。

二、白飯が似合う男？

二、

彼がこの女子学園にやってきて一週間が過ぎた・・・誰にも名前を覚えてもらえず、今日も彼は他の生徒が授業をやっている時間帯に屋上で寝転がっていた。

「・・・平和だ・・・あれから一週間も経ったのに・・・女子高に男子生徒がやってくるというこの一般的なギャルゲーの感じなのに未だに女子生徒の名前を知らないどころか相手も僕のことを知らないなんて・・・一種のいじめではなからうか？」

そういつて寝返りをうつたのであった。別に女子生徒との交友を禁止されているわけではないが（勿論、学園外である。）もともと口先だけのこの雪那は思い切つて知らない女子に話しかけることなど出来なかった。遠くから見ただけである。

「・・・明日は明日の風が吹く・・・皆、どうしてるかな？」

自分がもといた高校の友達の顔を思い出す。あっちの学校での知り合いはほとんど男子生徒しか知らないが、馬鹿をやったりもしたものだと懐かしんでいたりもするのだが・・・

きーンこーんかーんこーん！

「おっと、お昼か・・・」

そういつて彼はいつものように空間を風ぐと屋上から姿を消す・・・

・と、同時に誰かが屋上の扉を開ける。

「あれ？誰か今いなかった？」

「気のせいじゃない？」

「あ、それって噂の次元魔でしょう？」

因みに、怪談話『次元魔』ということで彼の存在は知られていたりもするのだが・・・そのことを彼は知らなかったりもする。

場所は変わって学園長室。彼の祖母は学園長をやっていて恐ろし

い人物だと噂されており、この時間帯は誰もこの部屋の前を通ることはない。

「……ばあちゃん、僕……さすがに毎日毎日白ご飯は飽きるよ。」

彼の茶碗の上には何もものっていない白いご飯がのせられている。それにたいして彼のばあちゃんはあるものを取り出す。

「……ほれ、これが欲しいんじゃない？」

一枚の皿が取り出され、その皿の上にはおいしそうなハンバーグがおかれていた。それを見て雪那の目の色が変わる。

「ちよ、ちようだい？」

「そうじゃのう……あげてもいいが……交換条件じゃ。」

「う、うん！ 勿論！ 僕の白ご飯、あげるから！」

そういつて箸を伸ばす雪那の手に刀が引付く。

「……。」

「話も聞けない坊主の手はこれかろう？ 手癖の悪い人間の末路はどれもなくでもないものじゃ。おぬしも当然、それを知っているだろう？」

「はい、心得てます。」

そういつて箸を引つ込めて床に正座をする雪那。

「うむ、そういう殊勝な心がけがよい人間関係を作っていくのじゃ。」

主従関係の間違いではないのだろうかと思ったのは心の中の雪那である。

「このハンバーグはのう、今日の四時間目に調理実習があつた際にとある生徒が作ったものじゃ。そのこは……ストーカーにあつているそうでのう……」

「りよ、了解！ 自分はそのストーカーをみじん切りにしてまいりますので、その御手にある神々しきおかずを愚劣な僕にください！」

「うむうむ、物分りのよい孫を持つてわしは満足じゃ。いつでも死ねるわい。」

そうですか、それならさっさと川を渡ってくださいと思ったのは
ほかの人である。

「ほれ、味わって食べる。」

渡されたハンバーグを何回も何回も鼻で食べ、そしてようやく少量を口の中に入れる。甘口のソースと適度に焼かれている内部が彼の口の中でハーモニーを生み出していた。さめてはいるが、これはうまいと眼の端に涙をためながら雪那はこの幸せを噛み締める。

一段落ついたのを見計らって学園長は雪那に仕事を告げたのであった。

「……この学園の一年生……名前は余山^{よやま} 瑠美子^{るみこ}……歳はお前さんの一つ下の女の子……両親は仕事で海外、今は一人暮らしじゃ。部活にも入っておらず、その時間帯は一人で帰宅……情報によると、ストーリーカーにあっているのは以前からではなく、ここ数ヶ月の間らしい。日に日にエスカレートしてきており、私からの意見としてはそのストーリーカーが彼女と接触するだろうな。何をするかわからないから気をつけるように……そのストーリーカーの処分はお前に任せる。」

そういつて多忙な学園長先生は消えたのであった。先ほどの話をお皿を未練がましくなめなめしながら聞いていた雪那はうむといって立ち上がった。

「……よし、これは千万一隅のチャンス！彼女を現在進行形でストーリーキングしている奴を捕まえて……」

そこまでいつて雪那の頬がゆるむ。だらしのない顔の出来上がりだった。

「……ふりかけを分けてもらおう！ひゃっほう！明日からはふりかけエブリデイだ！！」

彼もまた、毎日の食事をいかようにしてすませるかという意外と
いうか……なんというか……そういうサバイバル生活を送っていたりもするのである。

本日の授業を完全に終えるチャイムが鳴り響き、部活生徒は部活に向かつていった。他の学校よりも授業時間が長いのでそろそろ月がその神々しい姿を現すところであろう。そして、ストーカー被害にあっている瑠美子が下駄箱に現れる。

「旅は道連れ世は情け・・・よっしゃ、お供しますよ。」

屋上から完璧に校門を抜けるのを確認すると彼は空間を風ぎ・・・立ち止まった。

「・・・ん？俺もこのままだとストーカーじゃないのか？」

彼はその当然の疑問に悩んだが・・・

「・・・日々の食卓を楽しく過ごすため・・・それはかけがえのない存在・・・余山さん、ごめんなさい！！悪いけど、僕が興味があるものはふりかけなんだ。」

そういつて彼は闇の空間へと身を躍らせたのであった。

何事もなく知らされていた家まで残り半分といったところで彼女を監視していた雪那は誰かが彼女に近づいていることに気がつく。

その男は手によく切れそうなナイフを持っていた。当然のように雪那は奇襲をかける。敵はあっけなくその場に倒れこんだ。

「・・・これで終わりか・・・いや・・・そうじゃないみたいだな。

この人は別か？」

どうやらこれは長い帰路になりそうだと二人目の怪しい人物が瑠美子に迫っている。瑠美子に掴みかかり、瑠美子は悲鳴を出す。

「きゃあゝ」

「へっへっへ！」

「やめろ！この変態野郎！僕のふりかけライフのために・・・消えてもらう！」

「ぐはあ！！」

・
そういつて掴みかかっていた男はその場に倒れる。あっさりと・・・

「あ、ちよつとやりすぎたかな？まあ、僕の食卓を邪魔するような

奴は月に代わっておしおきよってね・・・さて、余山さん、怪我はありませんか？」

その場でばかんと雪那を見ている少女に雪那は片手を出す。

「あの、助けてもらったところ失礼ですが、どちら様でしょうか？」
学園内ではその存在を知られてはいけけないのだが・・・学園外なら自由だと言われたので正直に告げることにした。

「・・・あの恐ろしき学園長先生の孫の狭間 雪那です。」

証明書として学園長と一緒に映っている写真を提示する。その写真は学園長が珍しく笑っており、雪那が引きつった笑いをしている場面である。

「・・・本当・・・みたいですね？でも、なんで・・・？」

「いえ、実はですね・・・こほん、たまたま、ふりかけが欲しくなつてですね？それで、ちょっと歩いていたらあなたが叫び声を出していたところを目撃しまして・・・それで、体当たりをしたんです。まあ、背後から襲えば大体の敵は倒せます。」

「あの、その右手に持つてる細長いものは・・・？」

彼が右手に持っているのは彼の愛刀『虎雪羅舞』である。慌てて仕事道具を次元の狭間に放り投げる。実際はこれでぶったいたのであるのだが・・・

「き、木の棒です。」

「そうですか・・・助けていただいております。」

「あの、これから警察にいきましよう？」

「・・・そうですね。」

現行犯の男を引きづりながら（本当は空間に投げ入れて警察に突き出すほうが早い。）雪那は生まれて初めて・・・ではないが、女の子の隣を歩いていたのであった。

「・・・雪那さんでしたっけ？」

「はい。」

彼は内心

「よっしゃ、獲物がくいついたぜ！」と心踊っていたりもする。

「あの・・・何かお礼をさせてください。」

彼の心の中は飛び上がりばかり・・・

「じゃ、お言葉に甘えて・・・すみませんが、恥ずかしながらあなたの家にあるふりかけを・・・」

そういうととても不思議そうな顔をする余山にようやく雪那は気づく。これは少し、頭のおかしい人間の言動ではなかるうかと・・・心の中では会議が開かれていたりもする。

「・・・これは由々しき事態だ。たかがふりかけをくれとは・・・我々は少しばかり早計ではなかったのか？」

「うむ、しかし・・・一週間の白飯だけ・・・これが我々の神経回路を狂わせたのはまちがいないことだ。」

「そうだな、それに対しては早急に対策を練るべきだったと私は思う。やはり、今回はふりかけでどうだ？」

「馬鹿が・・・ここは正義の味方として何も要求するべきではない。あきらめろ。」

「おい！我々は正義の味方ではないぞ！」

「それもそうだな・・・」

まとまりきれず、結局雪那はため息をついて白衣から一枚の紙を取り出して彼女に渡したのであった。

「・・・これは？」

「お礼は・・・悪いんですけど、この番号に連絡してください。僕にもその・・・都合がありまして、あつかましいですが、何か食べ物を持っています。」

雪那にとってそれはとても恥ずかしいことだった。そして、交番が目の前にあることを確認するとさっさとその場からいなくなったのであった。無論、彼が次元の狭間に隠れたのは言うまでもない。

「・・・ふりかけ、惜しかったかな？」

交番に入っただのを死角から確かめて彼はため息をついた。

次の日、雪那は再び昼休みに白いお飯を食べていた。

「・・・この白ご飯の上にはサケのふりかけが載ってるぞお！サケのふりかけがのってるぞお！サケのふりかけが・・・」

何度も何度も自己暗示をしながら食べていたのであった。今日は学園長が不在であったので、学園長の机を上から下までふりかけなどを求めて探した雪那だったが・・・残念ながら見つけることが出来なかった。

「・・・ううむ、やっぱり僕には自己暗示は無理かな？」

おとなしくご飯を食べ終わると彼は近くにあるトイレに行こうと学園長室の扉を開けた。普段は能力を使わずに歩かなければ両の足が飾りとなってしまうから何かがあるときでしか基本的には使用禁止なのである。だが、その日は使うべきだったかもしれない。

「あ・・・雪那さん！」

「あー！」

目の前に女子生徒が立っていたのを見つけると慌てて彼は扉を閉めた。そして、全身から吹き出る嫌な冷や汗をどうやって止めるか・・・いや、どのようにばあちゃんに説明するか考えていた。しかし、今から逃げればまだ大丈夫・・・先ほどの一瞬では顔は見られなかったはずだ・・・と思っていたのだが・・・まあ、名前を呼ばれたのは気のせいだ。

「あの、雪那さんですよな？」

「ば、ばれＴＥＬ！至急、ばあちゃんに電話を・・・いや、そんなことしたら僕が・・・」

ぱにくる彼の後ろで扉を開ける音がした。

「学園長先生に会いに来てたんですね？忘れ物を渡しにですか？」

「・・・え？あ、そ、そうです・・・ええ・・・ばあちゃん、そそっかしいから・・・」

背中に寒気を覚えて彼はそこで口をふさぐ。

「あの、余山さんはなんでここに？ばあちゃん、恐れられているんでしょう？」

「そうですね・・・実は、雪那さんにこれを渡しておいてもらい

たくて・・・」

そういつて一つのお皿を取り出す。

「これは・・・ハンバーグ！」

「ええ、そうなんです。本当は昨日作ったはずなんですけどね・・・先生が材料を買い間違えたらしくて・・・もう一回、作ることになっただんです。」

渡されたお皿を本当に嬉しそうに受け取った雪那であった。

「あの、味の保障はできませんけど・・・昨日も学園長先生じきじきに私のところに来てもっていったから大丈夫だともいいます。」

「大丈夫、昨日食べたから・・・」

「え？」

「・・・いえ、おばあちゃんが家で、そのようなことをいつてましてね・・・あはは・・・」

愛想笑いを浮かべて雪那は内心、このまま心労で死んでしまうのではないかと思っただのであったが・・・

「・・・じゃ、ありがたくいただきますね？あ、もうその携帯電話の番号は必要ないですね。好きにして結構です。おっと、そろそろチャイムが鳴りますから教室へ・・・」

そういつてちよつとだけ強引に瑠美子を追い出した雪那であった。喜びの舞を踊っていると彼はいつの間にか戻ってきている学園長に對して先ほどの机の謝礼をしたそうである。

二、白飯が似合う男？（後書き）

小説を書くあたって、自分がとても苦勞していることは登場人物の名前だったりします。あたらしい人物の名前を考えるたびに頭を悩まし、思いつかなかつたりするんですよ。あと、雪那が使っている能力だつて自分が小さいころに「どこでも。アがほしいな。あれがあつたら便利だろうに。」と思つたからこうなっちゃいました。やれやれといったところでしょうか？とりあえず、二回目・・・読者の人にどのように移っているかわかりませんが、これからよろしくお願いします。

三、屋上が似合う男？

三、

「あちゃ、ここの問題がわからないよお。」

小声で呟く一人の女の子の机の端っこにそつとカンペが置かれる。

「お、サンキュ・・・って？あれ？」

「出席番号十二番、声を出さない！」

先生に怒られてその生徒は

「すみません。」といって再び中間テストの問題に取り掛かったのであった。

学生の戦場は教室である。

普段から基礎をしっかりとやっていれば実践である『テスト』でよい点をとれるのだが・・・それをやっていなければできないものではない・・・解けない問題は解けない・・・ままなのである。しかし、それを防ぐ方法が一つだけ・・・カンニングというスポーツで言えばドーピング的扱いのやってみればたら即零点の禁忌が存在するのである。

その日もテストで午前中授業だったのだが・・・一人の少女が友達である先ほど注意を受けた女子生徒に話しかける。

「芹奈、さっきは誰と話してたの？」

「んゝしらね。あたいを助けてくれたやつかなあ？でも、誰も手を貸してくれそうないし・・・余山・・・でもないなあ。あれ？余山が珍しく携帯を扱ってんな？これも、おかしいことだな。」

そう呟く柏木^{かしわぎ} 芹奈^{せりな}は先ほどの奇怪なことに首を傾げるのだった。

一人の少年が屋上で大声を出そうと息を吸った。そして・・・

「・・・あれから約一ヶ月経ったのに、知り合いは余山さんだけなんだあ！！！」

と心の中で大きく叫んだのであった。白衣が風にたなびく。

「さっきだつて馬鹿っぽい女の子の手伝いをしてあげたのに・・・くそつたれがあー！！ギブアンドテイクは余山さんだけかあー！！僕の努力を返せえ！！」

ブルブルブル！

そういつていると身内しか知らない携帯電話が鳴り響く。

「おっと・・・誰だ？・・・知らない番号だな。」

ボタンを押して耳に付けてみる。

「あ、あのう・・・狭間 雪那さんですか？」

「あゝそうですけど？どなたって・・・もしかして・・・余山さんですか？」

毎日、お昼休みになつたら学園長室にやってくる人物を頭の中で形成する。無論、二度度と会わないように雪那のほうを避けていたのだが・・・

「あの、あれから学園長室にいませんので失礼かとは思つたんですけど電話しました・・・よろしければ私と一緒に公園に今度の日曜日行きませんか？お弁当持ってきてますから！」

再び白いご飯だけの生活を送っていた雪那の瞳に欲望という存在が牙を剥く。

「そ、そうですか？なんか悪いなあ。」

「いえ、この前助けてもらいましたし・・・」

「もう、あの分は貰いましたから・・・でも、そこまでいうのなら・・・やっぱ、いいです、気にしないでください。」

「そんな！」

目の前に何時の間にか現れている学園長に完璧に欲望が退治されており、体を恐怖が支配する。目が釣りあがっているところを見るととても、とさかにきているようである。

「・・・・・・・・。」

「あの、雪那さん？」

「・・・じゃ、じゃ・・・また、連絡を・・・うぎゃああー！！」

ぷつり・・・ツーツー

普段だったら昼休みの時間帯なのだが、午前中に本日のテストは終了しているので残っている生徒はいないようだった。生徒ではない雪那はソファでごろごろしていた。

「やれやれ、携帯没収だなんて・・・」

学園内での生徒の携帯は使用禁止らしく、彼はため息をついた。

「はあ、やれやれ・・・」

ため息をついていると廊下の前を誰かが通る音がした。そして、学園長室の前で立ち止まる。ノックをしないなら学園長、ノックをするならば他の人と決めているのでせつなは空間を切り裂く準備をしていた。しかし、普通に扉が開けられる。

「あ、ばあちゃん？俺、もうしないから・・・携帯、返して・・・」

「そこまでいつて彼は凍りついた。」

「どうも！またきちやいました。雪那さんは今日も来たんですね？」

彼は思う

「何時から、若人はノックをする礼儀を忘れ始めたのだろうか？」

と・・・

「・・・余山さん？」

「そうですね、覚えててくれたんですね？」

嬉しそうにしているのだが、雪那としては全く嬉しくない。我が身が危ないのだ。

「あの、実は学園長先生から呼び出しがありました・・・」

「そ、そうなんだ・・・じゃ、僕はこれで・・・」

そういつて学園長室のもう一つ奥の部屋に逃げ込もうとする何時の間に帰ってきていたのか知らないが中から学園長が姿を現した。

「・・・こほん、雪那、何やってるんだい？」

「ば、ばあちゃん・・・僕、家に用事ができたから・・・帰るね。」

逃げようとする雪那の首筋に鋭い何かをあてる仕草をする彼のおばあさん。立ち止まる雪那を見て満足げに微笑む。

「さ、もう二人のお客さんも中に入ってくれ。」

「え？」

振り返った雪那は驚いたのであった。何故なら、どこかで見た顔だからである。

ソファーの上にはお客さん用の湯飲み茶碗が置かれており、その近くには雪那がお盆を持って待機をしている。かれこれ、何分が経過しただろうか？

「さて、お前さんたち三人を呼んだのは他でもない……まあ、余山は勝手に来たのだろっけだね。」

お茶に一口手をつけて学園長は目の前に座っている生徒たちを試すような感じで見ていたのであった。

「……私の孫の事を知っているのは余山だけだろうが……先日の葛籠誘拐事件に、余山のストーカー事件、今日のテストのカンニング……」

明らかに最後のはしょばいのだが、これはしょうがない。

「……全て、私の孫が関係している。原因、解決、手助け……そのすべてとについていい。」

三人が驚いたような感じで雪那を見たので顔を伏せるように彼はそっぽを向いたのであった。無論、後ろ手で時空を裂こうとしたのだが、それも学園長に阻まれる。

「……納得いかないんですけど……大体、何が関係しているって言っんですか？」

少しばかり混乱している氷が学園長に尋ねる。

「……お前がロープでぐるぐる巻きにされているのを助けたのはその雪那だよ。背後から犯人を斬ったんだ。そして、あんたの口も切って他の人を助けることができるようにナイフを近くに置いた……まあ、普通にやったら負けるだろっけだね。」

「……本当ですか？」

「……疑り深い子はあたしゃ、嫌いだねえ……おい、雪那！」

「は、はい!!」

「いつものようにしてやりな!」

「で、でも・・・」

「はやくおやり!」

「りよ、了解!」

学園長が指を鳴らして、一瞬だが三人とも学園長のほうを見る。

その間に雪那はその場から姿を消して気がつけば氷の首元には木刀が当てられていた。

「・・・・・・」

「ま、これで信じる事ができないっていうのなら、しょうがないけどね。」

「ふうん、とりあえず、今日のテストの答えを覚えてくれたのもあんたか?」

そういつて木刀をしまっている途中の雪那に尋ねる芹奈。

「ん? ああ、そうだよ。本当はやっちゃいけないんだけど・・・・さすがに赤点をとるのをみすみす見てられないからさ・・・・。」

そういう雪那だったが、学園長は許していないようであった。

「・・・・雪那、芹奈、お前らは今度から毎日昼休みの間だけ、ここで勉強するように・・・・拒否するならば・・・・覚悟を決めることだね。」

「りよ、了解・・・・。」

「・・・・。」

学園長は静かにお茶を飲むと、今度こそ本題に入ることにしたらしい。いつの間にか雪那は学園長の顔が見えないような場所に避難していた。

「・・・・本当は雪那一人に頼もうって思ってたんだけど・・・・どうにも、それが無理みたいだからあんたたち三人に私からじきじきに頼みたいことがあるんだ。一年間、この学園の平穏を保つのが私の孫の役目なんだけど、見ていて危なっかしい。だから、あんたたちに雪那の手助けを頼みたいんだ。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……ほ、よかった。てっきり僕をばらにするのかと思っちゃったよ。」

「返事は別に今でなくても構わないし、手伝うって言っても別に危険なことをしろってわけでもない。ただ、いつもと同じように生活していて何か雪那が困ったことがあればその相談にのってやって欲しいだけだ。内容はこれだけ……じゃ、私は用事があるからね。後は好きにしてくれ。」

一人だけ去っていった学園長に対して三人はどのような心境だろうか？ なんだか居辛くなつた雪那は再び空間を凪いだ。

「あの、狭間君だっけ？」

「はいっ？」

片足を突っ込んだところで呼ばれ、後ろを振り返る。そこにはいつの間にか立っていた三人の姿があった。代表してなのか氷が中心に立っている。

「……悪いけど、あたしたちにもっと詳しく説明してくれないかな？」

「……わかりました。僕が説明できる範囲で教えますよ。」

片足を引っこ抜いて彼は再びソファに座るよう三人に言ったのであった。無論、お茶組系の彼は再び湯飲み茶碗に緑色の液体を入れなおしたことは言うまでもない。

ほとんどの事情をしゃべり、雪那は自分の分のお茶を飲んでいた。

「……それじゃ、狭間君は……」

「雪那でいいですよ。」

「雪那君は無理やりここを守るような感じになってるの？」

「まあ、主従最高と叫んでいる僕たちの一族ですからね。しょうがないんじゃないかと……」

「でも、この前私を助けてくれたのも義務だったの？」

そういつて少しばかり悲しそうな顔をする瑠美子。

「うーん、あれはハンバーグのお礼・・・ってところだろうね。」

「じゃ、あたいの時は？」

「あれは・・・見るに見かねて・・・カンニングはいけないことだけだね。」

三人の質問が終わったと見た雪那は立ち上がった。

「ま、別に今のところ何か困ったことなんてないけどね。大体、僕としてもここに長居してればそれなりに姿が見られたりするだろうし・・・現に、君たち三人がいいふうすすて事も考えられる。まあ、そうすれば僕も追い出されるか警察に突き出されるかどうなるかわからないけれど・・・あとは本当に君たち次第だから。ま、これから何かあつたら力になれるようがんばるよ。じゃ、そろそろ僕も用事（ごろ寝）があるから・・・ばいばい。それとさ、僕は正義の味方つてわけじゃないからね。簡単には助けられない。」

次元を切り裂いて雪那はさっさといなくなったのであった。

「・・・どうする？」

「・・・助けてもらったのも事実ですけど・・・。」

「あたいは別に・・・ちよつと、試してみたいことが・・・。」

そついう芹奈の眼には未だにあいつが本当にそついう奴なのか知れたがつていふ色がつ浮かんでいたのであった。

誰もいないはずの夜の学校に悲鳴がつ響き渡つた。

「どつしたんですか！！」

それは一つの教室から聞こえてきたのか、雪那は慌ててその教室に現れる。本当は彼も家に帰つていふ時間帯なのだが（家といつても学園長室の奥の部屋で二十四時間体勢）まあ、近かつたので現れたのである。

「・・・誰もいない？」

不意に後ろから襲い掛かられるよつな感じを受け、彼はあつとい

う間に次元を裂いて相手の後ろ側に回りこみ・・・首筋に刀を当てて・・・

「・・・柏木さん？」

途中で止めたのであった。

「あ、ああ・・・しかし、本物なんだな？あたいが悪かった。」

とりあえず刀を向けたことに対して詫び、雪那は彼女に尋ねる。

「一体どうしたんですか？」

「まあ、一種の試験というか、あたいの中の何かが訴えたとか・・・そんなものだ。でも、まあ・・・」

そういつてうんと頷く様子の芹奈に雪那は首を傾げる。

「他の二人は知らないけど、あたいはあんたを助けるよ。」

そういつて片手を差し伸べてきたのであった。勿論、雪那はその片手を掴んで握手を交わしたのであった。彼の心の中では感激の嵐が通過していったのだった。

四、白ける場所が似合う男

四、

昼休み、雪那は学園長室のおくの部屋でぐでつとすごしていた。寝不足である。

「・・・う、う、うん・・・きつい・・・きつい・・・ちょっと気合を入れすぎて見すぎたかな？」

そういつて誰もいないことを確認する。しかし、ここはまだ敵地・容易にエロ本などを取り出せば一刀の元に学園長に切り捨てられるに違いない。もちろん、雪那も・・・

「・・・我慢だな。ここは我慢、忍耐、指をくわえるんだ！」

そうしていると隣の部屋の学園長室の扉をノックする音が聞こえてくる。

「・・・おつと、人が来たようだ・・・でも、誰だろ？」

静かにしているとその人物は勝手に中に入ってきたらしい。

「・・・強盗か？」

「・・・雪那君？いるんでしょう？」

声に聞き覚えがあつたのだが、なかなか思い出せない・・・と、そういえば二日前に聞いたことがある声であつた。

ゆっくりと隣の部屋に通じる扉を開けるとそこにいたのは氷であつた。

「・・・あ、葛籠さんですか？学園長に何か用事でも？」

そういつて彼はおぼんと湯飲み茶碗をどこから取り出してソファーに座るように促す。

「どうぞ、座ってください。今、お茶を入れますから・・・。」

「いえ、結構。私はあなたに用事があります。」

「はあ、わかりました。」

そういつて雪那もソファーに座つたのであつた。

「どういった用件で？」

「この前のお礼を言いに来ました。」

「別に結構ですよ。前にもあれば僕の不幸際だといったではありませんか？こちらこそ、早めに犯人の居場所を特定していれば葛籠さんに不快な思いをさせないですんだはずですし、まだまだ、僕がいたら無かったことが原因です。だから、未だにお昼も白ご飯だけなんです。」

詳しく事情を説明した際に不幸際だと伝えたはずだと雪那は思っていたのだった。

「……いえ、私が悪いんですし……でも、男のあなたがここにすることはいけないことだと思っっているんです！生徒会長として！雪那君、スケベですよな？」

お茶を飲んでいた雪那は思いつきり吹いた。

「……げほげほ……生徒会長さんだったんですね……げほ、た、確かに僕がここにいることはいけないことです。ですが、さすがにそれは……僕のばあちゃんが承諾してくれるとは到底、思えません。僕のほうでも色々してみたいことがあるんですけどできないんですよ。これは由々しき事態です！蛇の生殺しなんです！僕だって、彼女がずっといないのに……拳句の果てに、僕は学校に行けていないんですよ！」

理不尽な怒りを氷にぶつける雪那。言ってて日ごろの鬱憤をはきだしたらしい。

「……そうですか、ですが……生徒会長としては男であるあなたの存在自体がやはり、まちがっていると思うんです。」

「……わかりました、僕が学園長を探してきますから……おとなしくしててください。」

そういつて雪那は空間を凪いでいなくなった。

学園町の姿は見え、困ったことになったものだと屋上でため息をつく雪那。この時間帯は授業をしている時間帯であろう。だが、誰かが屋上にやってきたようだ。

「やばっ！不良生徒か？」

この学園にそのような輩はいないことをしらないのか、雪那は慌てて空間を風いでその場から退避したのであった。

彼は別に今日ぐらい外にいても構わないだろうということでも学園外に出たのであった。

「いやあ、やっぱりあんなことを面と向かって言われたらさすがに傷つくわな。」

そういつて角を曲がろうとして・・・誰かとぶつかりそうになった。

「すみませんって・・・カズマ！」

「お、雪那か？お前、こんなところで何しているんだ？噂じゃ、あの学園に隠れて住んでるって言ってたぜ？」

そういつてやれやれというしぐさを見せる彼の友達、カズマ。

「・・・まあ、確かにそうだけど・・・なんなら、来る？」

「いいのか？」

「うん、別にカズマなら問題ないだろうし・・・。」

彼は空間を風いで手招きした。

「お、やっぱり雪那は便利だな。まるでドラ。もんだな。」

「ま、この空間に好き好んで飛び込んでくるのはカズマくらいだよ。」

「

今では雪那の部屋となつているところで彼の友達であるカズマはため息をはいていた。

「はあ、やっぱりお前も大変だな。俺も大変だけだな。」

「うん、ここの生徒会長にばれてね・・・まあ、ばれたっていうよりはあちゃんが話してたんだけどね。僕としてはこのままいつどこにつくかさっぱりわからないよ。」

そういつて雪那はカズマのほうを見てため息をつく。

「しかしまあ、カズマも綺麗になつてもんだよねえ。」

「ふ、お世辞を言われたって俺は何も出さないぞ？」

開数 あかず まなみ 真奈美。

雪那とは小さいころからの付き合いで、男兄弟の仲で育った彼女は何時しかしゃべり口調が男じみたものになったのである。まあ、中身は女の子なのだが……。

「でも、お前も女子高にいるんだし、誰かと発展したんじゃないのか？」

「そりゃないよ。大体、この学園にいても、基本的に僕は怪談話のようなものさ。誰かに正体をばらしたり、ばれたりしたら命に関わる。」

「その知った人間が？」

「いや、僕の命が危ない。」

そういつと首をすくめるカズマ。

「ま、お互い大変なのはわかったけど……来月、お前の許婚が家に来るっていつてたぞ？」

「あ、そうなんだ……でも、母さんたちはそんな話してなかったけど？」

「そうだろうな。」

彼の一族は代々、許婚という制度をとっている。古臭い手かもしれないが、そうしないと色々と大変なことになるのだ。

「あ、思い出したけど……僕には許婚がいなかった。」

「……なんでだ？」

「……なんだかさ、手違いで……いや、なんでだったかな？
これも由々しき事態なのだ。」

「ま、お前が元気だったっていうのはいいことだ。雪那、たまには俺に連絡してくれよ？」

「勿論……といいたんだけど、携帯がとられちゃったからなあ。」
ぶつぶついつているとカズマは立ち上がったのだった。

「じゃ、俺は帰るよ。」

「そう？まだいてもいいんだけど？」

「いや、おいとまさせてもらう。」

「わかった。それなら送ってくよ。」

そういつて空間を風ぐ雪那の横顔を眺めながらしばし考え込むカズマ。

「……まだ、選択の余地はあるってことかな？」
「？」

カズマもいなくなつて独りで寝転がっているといきなり扉が開いた。

「……あ、葛籠さん……すみません、まだ学園長を見つけていないんです。」

そこに立っていたのは氷であつた。

「……あの、何か？」

「先ほどの方は誰ですか？」

「はい？ええと、あれは……僕の友達ですけど？心配しなくても女の子です。さすがに、男子友達を入れるようなことはしませんよ。」

「……そうですか、それなら結構です。それと、このナイフを返しに来ました。」

そういつて一本のナイフを差し出す氷。それをじっくり見てから雪那は呟く。

「……いりませんよ。」

「え？」

「……そのナイフは確かにあなたを助けた人物が所持していたものです。ですが、それは僕ではない。矛盾しているようですが、そのナイフを僕が貰つてしまうと後々、僕が辛くなってしまうんです。だから、もらえません。」

丁寧に断つて氷に笑いかける雪那。

「……よろしければあたしにその理由を教えてもらえないでしょうか。」

「いいですよ……僕、やっぱりここを出て行くことに決めました。ま、僕たちの一族には色々あつてですね、そろそろ、許婚と会うよ

うな時期なんです。ですが、僕の場合は手違いで相手がいないんですよ。僕はおおげさでうぬぼれているかもしれないですけど、女の人から貰ったものは必要以上に大切にしている性格なんで、出て行こうとする場所でそんなものを貰いたくないんです。そのナイフを見るたびに思い出しますからね。別にあなたのことを好きだとは思っていません。でも、やっぱり話していたら友人関係であるのはまぢがないと僕は思っているんです・・・荷物を整理したいんで、出て行ってください。」

「でも・・・」

「出て行ってください。」

「そんな・・・」

「・・・。」

空間を屈んで作った狭間に相手を押す。向こう側に見えるのは学園長室の廊下であった。

「・・・お騒がせしました。ばあちゃん・・・いえ、学園長には私からいっておきます。」

空間が閉じ、雪那の前から氷が姿を消したのであった。

「やれやれ、あとは鍵を閉めて終了!」

学園長室の鍵もかけてこれで誰も入れなくなった密室の完成であった。

「・・・やれやれ、お前は本当にそれでいいのかい？」

気がつけば学園長がソファーに座って雪那を見ていたのであった。
「うん、許婚だって僕にはいないんだからね。自分で彼女くらい探さないとき・・・。」

「適当に娘を拾ってくればよいではないか？それに、許婚は・・・」
「いや、そうそう落ちてはいないと思うけど？」

「・・・じゃ、余山か柏木を嫁にでも貰ったらどうだ？もしくは、カズマとか言う女は？」

「いや、知り合いであって彼女じゃないんだから・・・ダメダメ。」
そういつて雪那は自分の家に帰る準備を始める。

「ばあちゃん、とめないの？」

「まあな。許婚がいらないのも事実じゃしな。それで、龍の娘っ子とか知り合いはいないのかい？もしくは、思い出せないか？」

「いないいいない。とりあえず女の子の知り合いはカズマとかぐらいだし・・・あ、余山さんに連絡入れといってくれないかな？」

「俺の愛を受け取って欲しいと？」

「そうじゃなくて・・・お世話になりましたっていつてほしいんだ。」

「実際のところはお世話になっていないのだが、こういうものは気持ちの問題である。」

「他の二人は？」

「柏木さんには一緒に勉強ができなくなってごめんと・・・生徒会長にはなにも言わなくていいよ。追い出したかったんだからね。」

「どこか恨めしい響きを残しながらそんなことをいう雪那だった。」

「じゃ、ばあちゃんには悪いけどこの学園からは去らせてもらうよ。今度はまともな仕事を用意してきてね。」

狭間の空間から校門の前に出ようとして近くに氷がいることに気がついた雪那は慌てて引込んだ。そして、そのまま直行で自室の部屋に姿を現す。

「・・・やっぱり、誰も掃除とかはしてくれてないんだな。」

散らかった部屋を眺めながら雪那はため息をついていた。彼の部屋にはガン。ムのポスターがあったり、古風な虎の置物があったりととても趣味がさまざまであった。

「しかし、久しぶりとはいえ・・・懐かしいなあ。一ヶ月は経つてるし、うれしいなあ。」

そういつて彼はベッドに倒れこんでそのまま寝てしまったのである。勿論、疲れていたこともあるし、面と向かって女の子からいなくなってしまう！的なことをいわれたのもショックだったのである。

夢の中では龍に追いかけられまくっていた雪那はようやく眼を覚ました。外は既に真つ暗である。

「……ふあ、やれやれ……ねちゃったのか……」

そういつて荷物を降ろして夕食を食べに下に降りていった。

「……余山さんや柏木さんには悪いけど忘れないとな。彼女たちと僕は大体、住む場所だつて違うし。」

うんうんと頷きながら今の時間帯は家にいないだろう家族を探すこともなく彼は一人で食事の準備をする。

今日の夕飯はハンバーグであった。無論、作つたのは雪那自身であるが……

「やっぱり、味は余山さんのほうがうまいな。それに……。」

手に持っているナイフを見て氷のことを思い出す。

「はあ、なんでこうなるんだ？」

そして、唐突に鳴り出した電話に首をすくめる雪那。

「……母さんたちかな？」

電話をとれば相手は学園長……なにやらよからぬことが起こりそうな雰囲気には彼は首を振りながら挑んだのであった。

五、格式張った許婚制度が似合わなかった男？

五、

目の前に対峙する相手はずっと目を閉じていた。少年はふと、上を見上げた。いつの間にそんな天気になっていたのか、空からは白い雪が降ってくる。

「・・・始め！」

近くにいた老人が手を振り落とす。そして、彼は目の前の少女を見据える。

勝負は一瞬だった。

彼の目の前に相手は倒れ、彼が着ていた白衣を紅に染める。あれから、十年・・・。

雪那は呼び出されたファミレスで居心地悪そうに座っていた。目の前にはいつかのように対峙していた相手の成長した姿があった。

「・・・。」

「・・・。」

「雪那、許婚のことだと思い出したんだが・・・そういえばお前が許婚を却下したんだったな。」

「う・・・確かに・・・そんな記憶が・・・」

雪那はそういつて目の前にいる相手を見ないようにオレンジジュースに口をつけたのであった。氷が完璧に解けてしまったのか知らないが、とても薄い。

相手は眉一つ動かさずに雪那の手元を眺めている。

「・・・。」

「わざわざ、決闘を申し込み・・・お前を好いていた相手からお前は逃げたんだったな。」

「・・・そ、そうだったかな？僕は忘れちゃったよ・・・あはは・・・」

命の危険にさらされているような感じがしてならない彼の身としてはどうかしてごまかさないかぎり、怪我ではすまないかもしれない。

「・・・そういえば、なんで僕は呼び出されたの？」

「簡単じゃ、お前の“元”許婚のリデリアがお前に決闘を申し込みに来たのじゃ。」

「け、決闘って・・・」

「ドラゴン族の娘じゃからなあ、プライドが許さないんじゃないのか？」

「・・・。」

それに対しても無反応なのか全くしゃべらないリデリア・D・ハートネス。以前は明るい子だったかな？と考えている雪那だった。

「決闘って・・・大体、今度は何をかけてしようっていうんだろ？」
はて、あの時は何をかけて決闘をしたのかさっぱり思い出せない雪那はおばさんから小突かれたのであった。

「・・・ばかたれが・・・お前が決闘に負けたら当然のように相手の思っままじゃ。」

「じゃ、じゃあ・・・僕が勝ったら？」

「・・・拙者が負けたら腹を切ります・・・」

ようやく凜とした声が聞かれ、雪那は表情を見るために相手のほうに顔を向ける。

「・・・腹って・・・別に切らなくても・・・それに、腹を割って話すの間違いじゃ？」

「雪那、お前は馬鹿じゃ。まあ、なんにせよ・・・雪那はその決闘を受けるのか？」

「できれば受けたくないんだけど・・・」

「リデリア、このように雪那は非常にお前との戦いを求めている。場所は私のほうから用意させてもらうからまた、報告してくれ。」

「わかりました。それでは、拙者は失礼します。」

そういつてリデリアは他の二人の会計も終えて先に帰っていったのであった。

「……ばあちゃん、リデリアのこと全然思い出せないんだけど？」

「まあ、そうじゃろうな。おぬしに負けた後、リデリアはこの地を去り、今まで毎日修行を積んできたそうじゃ。よほど悔しかったのじゃろうな。とりあえず、雪那……まあ、今のおぬしじゃダメじやろう。」

「確かに……。」

雪那はリデリアを切ったときにそれがトラウマになって女の子だけは切ることができなくなったのである。

「でも、それはリデリアに教えないでね？」

「む、何故じゃ？」

「当然、そんなことをしたら見た目がちがちで律儀そうなりデリアは絶対に決闘を続けないだろうからね。」

「おぬし、切り捨てられたらどうする？」

「……いや、なんとかするよ。」

それ以上、何もいわずにかれの祖母は首を振ったのであった。勿論、それは雪那が何か考えを持っていると知っているからではなく、その

「なんとかするよ。」がその場しのぎだということを知っていたからである。

そして、決闘当日……あの日と違って晴天である。雷でもなつて中止にならないかなあと思いつながら決戦の地……彼としては来なくなかった女子学園に舞い戻ってきたのであった。場所は屋上。観客付であった。

「……。」

雪那としては声も出ないくらいである。

「・・・ばあちゃん、この人たちは？」

「うむ、面白い余興があると連絡しておいた。」

氷、瑠美子、芹奈であった。

「・・・彼女たちは黙っておく様にしておいたから、応援もしないが・・・がんばれ。」

「・・・結果は見えてるけどね。後は何時に、終わるかだよ。」

既に決闘の地に来て精神統一をしている相手に頭を下げて雪那は相手を見据える。

「・・・両者、始め！」

そんな声が聞こえ、決闘は始まったのであった。

「でやああああ！！！」

先に仕掛けたのはリディアのほうであった。それを雪那はよける・
・まあ、彼の場合は元からよけるしかできないのだが・・無論、
ばれないように刀は所持しているがそれは木刀であった。

「はああああ！！！」

「おっと！」

雪那の前髪が切断され、空に舞う。あたっていたらしゃれにならないだろう。相手の間合いから離れて気がつけば自分が屋上の隅にいることに気がつく。

「・・・！！！」

「だああああ！！！」

相手の刀が迫ってきていたので雪那は屋上から飛び降りた。

「・・・！！！！！！！」

観客の三人は慌てて雪那の落ちたところから下を見るが、雪那の姿はなかった。

「ふう、死ぬかと思った。」

いつの間にか反対側の屋上の隅にいる雪那を見て三人はため息をついたのであった。

「・・・雪那殿、真面目にやっておられるのか？」

「も、勿論・・・。」

「あの時と違い、一撃で終わらせようとしなのは何故であろうか？」

「それは・・・その、戦い方を変えたというか・・・」

あなたのせいですとはいえずに雪那は黙り込んでしまった。

相手としては余裕の表れかと勘違いし、再び、雪那に踊りかかる。ぶれるその姿を見極めながら相手の刀のないところに体を割り込ませるようにして逃げ惑う雪那。情けないことこの上ないが、そう簡単に切られてはたまらないのである。しかし、白衣を一寸も切られていないところはさすがというべきだろうか？

「たあ！やあ！」

「うわっ！」

全てぎりぎりで交わして隙を見て離れる。前言撤回・・・そろそろ危なそうだ。

「む、やはりふざけているのでは？あの日、拙者のプライドをずたずたにしたように・・・。」

「・・・リディアさんのおかげであの日のことを少しばかり思い出せたような・・・。」

決闘をした理由を思い出した雪那。実際のところ、次のようなことがあったのだ。

「雪那、お前の許婚は百年に一度の逸材でな、伝説の存在だ。よかったな。」

「・・・でも、あの人、ちょっと我が儘だよ？自分より、小さい子を虐めてたし・・・僕、そういう人は嫌い！」

「それなら、お前が正せばいいじゃないか？あの子は素直に受け入れるぞ。」

「うん！」

そして、小さいころの雪那は勝ったときに倒れているリディアに「僕（我が儘な）君が大嫌いだ！」とだけいったのであった。重要な部分を言いそびれていたのである。

「・・・なんとなく、あの時切って正解だったのかな？」

馬鹿らしくなった雪那は何を思ったのか、木刀を相手に投げつける。当然、一直線しか進まないはずの木刀を相手は軽やかなステッ
プでよけ……

「うぐっ!!」

唐突に食らった右肩への一撃を気力でカバーし、リデリアは後ろにいるであろう、相手に刀を振り落とす。そのわき腹に、さらに一
撃……

「……次元切断流奥義 壱ノ型 武迂眼乱!!」ぶーめらん

木刀を腰に差すような仕草を見せて屋上に白衣をなびかせる雪那。
相手はその場に膝をついていた。

「……そこまで!雪那の勝利……」

「くそう!!」

本当に腹を切ろうとしているリデリアだったのだが、手にしている刀、腰に差している刀が二本とも、粉々に砕けたのであった。

「腹を切る前に、僕からあやまりたいことがあるんだ。」

そういつて雪那はリデリアに話しかける。

「……また、拙者に情けをかけるつもりか?」

「いや、このままあの世に旅立たれてうらまれる前にリデリアさんに言っておかなくちゃいけないことがある。僕はあの時、君に『我が儘なところを直して欲しい』と言ったつもりだった。ただ、それだけだよ。じゃ、僕はこれで……ここ、女子学園だから僕のような男がいるといけないんだよね。」

こっちに走ってこようとしていた三人に対して何も言わずに雪那はさっさと空間を切断していなくなったのであった。その場には、きょんとした表情のリデリアと他の三人、そして、この学園の主が残っていたのであった。

自分の部屋で久しぶりに掃除をしていた彼の耳に母親の声が聞こえる。

「雪那、あなたの友達が遊びに来たわよ?」

「はい、わかった。」

カズマが久しぶりに遊びに来たのだろうかと思っただけは下に降りたのだが・・・そこで、眼を疑った。

「・・・葛籠さん、余山さん、柏木さんに・・・リデリアさん？」

とても嫌そうな顔をして雪那は空間を風いだ。そして、そこに飛び込んだのであった。勿論、出て行けといわれて学園から家に帰ってきてその追い出した相手を許してそのまま仲良く遊べるような軽そうな性格をしていない雪那なので顔を見るのも嫌なのである。向かった先は当然、学園長室であった。

「おや、珍しく怒ってるね？どうかしたのかい？」

「どうかしたのって・・・ばあちゃん！何で僕の家を教えたのさ！あの、僕を追い出した人だよ？」

「ふうん？あれはお前が自分で出て行っただけじゃなかったのかい？もとから女子高はいやだって言っただけじゃないか？」

「そりやいったけど、他の女子高ならよかったなって・・・とりあえず、友達でもない相手と僕は一緒にいたくないよ。」

そういうとどこかのコンビニで彼女たちが帰るのを待つことにした雪那はさっさと空間を風ぐ。

「まあ待ちなさいって、ほれ、この書類を見なさい。」

「ん？」

それは一族全員が持っているいわば、証明書のようなものだった。これには個人的な事も書かれているし、許婚の情報も書かれていたりする。

「・・・許婚の欄がいつの間にか埋まってるって・・・！え、何であの三人とリデリアさんが入っているの？」

許婚予備軍としてあの三人の名前が書き連なっていたのであった。

「一夫多妻じゃないぞ？この中から選べ。」

「・・・。」

「学園を守る仕事もあるが、それはお前の親戚たちで補わせる。つまり、お前はこの四人を基本的に守ればいいということじゃ。」

「そんな・・・大体、あっちのご両親に話はしたの？」

「当然じゃ、どこに表向きは財閥の一族に入ることができるというおいしい話を蹴るものがおろうか・・・それに、一度は助けたということも事実じゃ。」

まあ、芹奈の場合はカンニングを手伝った感じなのだが・・・

「不満か？」

「不満じゃないけど・・・追い出されたってことだし・・・大体、葛籠さんは僕を完璧に嫌ってるじゃないか？」

そういつと学園長はため息をつき、こう告げたのであった。

「・・・明日は日曜日じゃろ？近くの田丸公園にこい。」

そういつて姿を消したのであった。

六、ひざ枕が似合う男？（前書き）

感想、評価随時募集中です！皆さんがどのように思っているのか知りたいです。

六、ひざ枕が似合う男？

六、

言われたとおり、午前八時ほどから彼は公園の噴水近くのベンチに一人、腰を下ろしていた。

「・・・ばあちゃん、普段なら朝五時には眼を覚ましているのに・・・遅いな。」

彼もそれに合わせて起きたつもりなのだが、既にいなかった。やはり、ばあちゃんには適わないかといった感じで雪那は普段どおりに公園にやってきたのである。

「ちよつと、がんばっておきすぎたな。ふぁ・・・眠い・・・」
そのまま睡眠モード。彼は眼を瞑って夢のなかで羊を飼い始めたのであった。

羊飼いになった夢を見ていた雪那は枕に顔を擦りつけまくっていたのであった。

「ちよ、ちよつと!」

「ひゃい?」

眼を覚ませばそこには透き通るような肌の壁が広がっていた。雪那は体を起こし、公園にいたことを思い出した。

「あ・・・。」

「・・・。」

目の前にいたのは氷であった。顔を真っ赤にしているので雪那は怒っているのだろうと勝手に解釈して頭を下げた。

「ごめんなさい!僕が悪かったんです!それでは!!」

いつもより大きく空間を裂いて雪那はそれに飛び込もうとする・・・が、それは全速力で氷に防がれたのであった。

「ちよ、ちよつと・・・悪いですけど、まだ僕は警察に用事はありません!誤解です!誤解なんです!」

「話を・・・聞いて欲しいの！」

「やめてえ！だ、だれかぁ！襲われるぅ！！」

他の人が見ても別に気にも留めていなかった。どうやら、ふざけあっているようにしか見えていないらしい。

「・・・雪那さん！」

とうとう、肩を掴まれて雪那は両手を胸の前で降参の仕草を見せる。

「・・・わかりました！実際、触って試せて嬉しかったと思いました！初めてですし、嬉しいものは嬉しいんです。世の中、ギブアンドテイクなのは知ってます。僕が警察に行けば全て丸く収まりますね。いきますよ！いけばいいんでしょう！」

そういつて雪那は空間を切断し、次の瞬間には警察の前に姿を現していたのであった。

「はい、つきましたよ。じゃ、いきますからね。」

そういつて歩き出す雪那の腕を今度はがっちりと抱きしめる氷。

「・・・！こ、これ以上僕の罪を重くしないでください！胸があたってます！」

まあ、これもまたはたから見たら見せ付けているようにしか見えない。

「謝りたいんです！」

「謝りたいって・・・何を？」

「追い出したことです！」

「追い出す？何の話ですか？」

進む足を止めたのを確認して氷はようやく雪那を離す。その瞬間に雪那ははしりだそうとして再び氷に腕を抱きしめられる。雪那のフエイントは失敗したのである。

「あたしが・・・いえ、生徒会長の私が雪那さんを学園から追い出したことです！」

一気に雪那の表情は暗くなる。

「・・・その話はしないでください。もう、僕には関係のない

話ですから……。」

「そ、そんな……じゃ、じゃあ……私たちとも……？」

「当然です。僕はなぜかあなたのことを知っている一、男子生徒です。」

交番から先程の様子を見ていた暇な警官さんは

「お、別れ話か？」と見ていたのであった。彼も暇なのだろう……。

「……。」

「それを望んだのはあなたなんです。別に責めるわけじゃありませんが……。」

その口調は完璧にすねており、彼女を責めていた。

「……所詮僕は、誰かから邪魔だ、出て行けといわれたら姿を消すしかない臆病者なんです！あなたの心配していたとおり、確かに僕は何度か覗こうとしたんですけど……そのときは自らの体を口で縛って耐えたんです！」

一度、それもままならず見に行ったところ彼の代わりに彼の祖母が彼をがんじがらめにして屋上からつるしたりもしたのだが、この際それは知らなくていいことである。

「……ま、確かに……あなたの言うとおりです！信頼を手に入れたかった……僕としてはそれだけなんですけどね。でも、僕はあなたを許すことができません。」

そういつて今度は言い返すことのできていない葛籠の手を振り解く。そして、彼はそんな彼らを見ていた警官の所に向かっていったのであった。

「……現行犯です。あの人の膝の上で寝ました。捕まえてください。」

「は？」

尋ねられた警官のほうは

「何故、彼氏が彼女の膝の上で寝てはいけないのだろうか？」という疑問にとらわれていた。

「君、悪いけど僕は君たちのような小さな問題に巻き込まれたくないんだ。」

やるなら他でやってくれといわんばかりの警官。

「ほら、外で君の連れが待ってるから出て行ってくれ。ここは新手のデートスポットじゃないんだ。」

「何か、勘違いしていませんか？」

「勘違いをしているも何も・・・君たち、通行の邪魔をしているのに気がついていないのかい？職務の邪魔だから、さっさと出て行ってくれ。」

結局、何をしに来たのかわからない雪那は見ず知らずの男の人の前で空間を切断することもなくでていったのであった。

雪那は歩き、その後ろを氷がついていったのであった。

「・・・・・・・・ついてこないでください。」

「・・・・・・・・あたし、あなたに許してもらうまでずっとついていきます！」

彼は頭の隅で

「そう？それならずっと許さない・・・そうすれば君とずっと一緒にいることができるから・・・。」と考えてはかばかしくなってその考えを頭の隅の焼却炉に放り込んだのだった。そして、最高温度でその考えを燃やす。

「・・・・・・・・わかりました。そこまでいうのなら・・・・・・・・いえ、ついてこれるもんならついてきてください。」

右手を振り下ろし、彼は白衣をなびかせて裂いた空間の中に入っただのであった。このような能力を持つ人は少ないのでまず、ついてはこれない。

だが、世の中例外というものも存在する。

「ってうわあ！」

そう、使い手の体の一部分を掴み、共に空間に入ればどこまでもついていけるのである。

「・・・放しません。」

そういつて短いスカートからのびる長い足で雪那の腰辺りをしっかりホルドした氷は手を首に回して後ろから抱きつくような感じになる。

「ちよつと！女の子がそんな大胆な・・・押し付けないうください！や、やめて・・・」

「・・・許してくれるまでこのままです。」

公衆トイレの男のところに来たので今のところ人がいないのが救いだろう・・・彼はトイレの中で暴れまくっていた。

「放してえ！」

「そのまえにあたしを許してください！」

そこへ、子連れのお父さんがやってくる。

「あ・・・」

「・・・」

「し、失礼しました!!」

雪那はさつさと空間を裂いてその場から離脱・・・向かった先は自室であった。

「・・・僕が悪かったです。いじけすぎましたから降りてください。」

「・・・本当ですか？あたしのことを許してくれるんですか？」

「許します。さ、早く手遅れになる前に下りてください。約束ですからね？」

雪那はベッドの上に氷を降ろす。降ろされたほうの氷は辺りを見渡し、そこがベッドだということに気がついて意味深な視線を雪那に向けてそのまま自分はベッドに仰向けになって眼を瞑ったのであった。

「・・・はあ、何やってんだか・・・ほら、起きてください。」

「初めてなので・・・」

「初めてって何が！」

「・・・」

とうとう、黙ってしまった。ごくりと飲み込んだつばの音で雪那は自分の顔を思いつきになぐって平常時を保っていた。

「・・・お茶、持ってきますから待っていてください。」

そういつてその場を後にしたのであった。

お茶をついで戻ってきた雪那は服を脱ぎだしている氷に絶句。後ろから別の用事でやってきた彼の母親もそれを見て絶句。

「・・・雪那・・・。」

「母さん、待って！その危ない刀、しまおう？ね？僕をぶったこ
うがたたつ切ろうが・・・事実は変わらないって！あ、そ、そうい
う意味で言ったわけじゃ・・・違うの！違うの！僕がやったわけ
じゃないっていう事実で・・・ぎゃあああああ！！！」

夜空に月が浮かんでいるのをぼんやり見ながら雪那はそんな綺麗
な夜道を歩いていた。久しぶりにみた修羅の顔・・・最後に見たの
は酔っ払って帰ってきた父さんに制裁を食らわしていたときだろう
か？実に、自分が未熟なのか理解できる。

「・・・雪那さん、大丈夫？」

「・・・うん。」

心配そうに聞いてくる元凶、氷に対して雪那は死んだような・・・
いや、実際にたたつ切られたのは間違いなくて、一度死んでしまっ
たかもしれないのだが・・・返事をする。

「・・・本当に大丈夫？」

「・・・うん。」

「あたしの裸、見た？」

「・・・うん。」

「・・・雪那さんってエッチ？」

「・・・うん。」

何を言ってもどうやら

「・・・うん。」しか返ってこなさそうなのだった。それに対して

氷は何か対策はないものかと考える。

「・・・雪那さん・・・あの・・・」

「・・・うん。」

「学園長が・・・そこに・・・」

そついうと隣に居た雪那はあつという間に姿を消した。

「・・・いませんよ。冗談です。」

そついうとどこにいたのか再び姿を現す雪那だったが、先程の状況から回復したようであった。その眼には狩られる側の弱者の瞳が覗いている。生き残るにはどうしたらいいか・・・捕食者を撒くにはどうすればいいか・・・全て計算されているようでもあった。

「・・・あの、雪那さん？」

「何？あ、ばあちゃんがいたら教えてね？」

「嘘ですつて。それより・・・あたしの裸、見ましたか？」

「残念ながら、見れなかったよ。」

そうはいっているのだが、未だに自分の祖母を警戒している雪那。甘い言葉とばあちゃんには気をつけないといけないのである。

「・・・警戒レベル1・・・安全と・・・」

ようやく警戒を解いた雪那であったが・・・そんな雪那に不満そうな顔をする氷。

「・・・ぶう、あたしががんばったのに・・・」

「そうだった！大体、何で服を脱ごうとしたんだ！」

「え、雪那さんって着たままがいいんですか？」

「そついうことじゃなくて・・・」

どう説明したものかと悩む雪那は困っていた。ここでまた

「名前と顔しか知らない相手でしょ！」といえは間違いない付きまとわれてしまうだろう。困ったものだと思っていた。

「・・・とりあえず、友達の部屋では服を脱ぎません！」

「友達つて・・・許婚ですよ？」

「そんな、白々しい・・・つて、冗談です。冗談！」

泣きそうになる彼女をなだめて雪那は帰りたい一心を抑えて歩き

出した。

「……早くあなたの家に行きますよ？」

「え！今日はとまっていくんですか？」

嬉々としている氷に雪那は首を振る。

「とまるわけじゃないですか！」

「確かに、お泊り道具を持ってきてませんね。」

こういう人だったのかと彼は思いながら答える。氷の人物像が彼の中で崩れる。

「早く帰らないと家の人が心配しますからね。」

氷の大きな家の前によく辿り着いた雪那は氷にさようならと告げて帰ろうとした。

「……また、会えますよね？」

「さあ？それはわかりませ……大丈夫です、会えますよ。」

また泣き出しそうになっている彼女に対して雪那はそう答えたのであった。勿論、愛想笑いをしながら……

何とか、仲直りすることができた雪那だったのだが、話はまだ、これで終わらない。

七、調子に乗りやすいという言葉が似合う男？

七、

再び、学園に戻ってきた雪那だったのだが、やはりというか、
というか・・・未だにその存在は怪談どまりなのであった。

男子トイレから叫び声が聞こえたので行ってみたら誰もいなかったとか、図書館で物音がしてもやはり誰もいなかったとか・・・そんなやつである。それもやはり雪那の仕業であり、前者はトイレで学園長にエロ本を読んでいたことがばれてその場で肅清・・・後者は本を勝手に失敬しようとして失敗に終わったということである。借りようとした本の題名は『彼女の作りかた』というものであったりする。

「はあ、『女学園に謎の怪奇現象！』ってどう考えても僕だよな？」

この学園の新聞部が発行している学園新聞にそのようなことが書かれていることを眼にして雪那は

「困ったことになったな。」と思っていたのであった。相手がどの程度の実力者でうまく騙せることができるのは不安なのである。

「そうですよ、雪那さんの存在がなんだか幽霊じみた方向に持っていかれているみたいですよ。」

時間帯はお昼休み・・・彼は一年生の瑠美子と共にお昼を食べていたのであった。

「・・・ううん、余山さんは・・・」

「瑠美子で結構です。」

「瑠美子ちゃんのクラスではどんな感じになってる？やっぱり、僕の存在が怪談にしるなんにしる知られてる？」

すこしばかり考え込んでいる瑠美子に雪那は期待の念を入れて視線を送ったのだが・・・

「……怪談というより、変質者がこの学園に隠れているのではないかと噂になっています。」

「……変質者ね……」

雪那はそういつてため息をついたのであった。そんな雪那を励ますために瑠美子は口を開いたのであった。

「だ、大丈夫ですよ！私、雪那さんが変質者じゃないことを知ってますから！」

いや、実際のところは雪那もそう、大差はないんじゃないのだろうかと思うのだが……以前の学校では

「マニアック狭間」と呼ばれていた男でもあるのだ。

「はあ……」

彼がため息をついたのと同時に学園長室の扉が勝手に開いた。

「あ、柏木さん？」

「おいつす、雪那。」

やってきたのは問題児、柏木 芹奈であった。彼女も暇なのかどうなのか……ではなく、ここにお勉強にやってきたのである。

「雪那、数学でわかんねえところがあるんだ。あたいに教えてくれ。」

「まあ、わかるどころなら……」

さつさと食器をどかして雪那は芹奈の勉強道具を置けるスペースを作ってみせる。その開けた場所に彼女は教科書を置いて自分は雪那の隣に座る。

「雪那、学園長から聞いたけど……」

にやにやしながらそんなことを言ってくる芹奈に雪那は「ほん」と咳をする。

「……さ、勉強勉強……」

「……まあ、やっぱり雪那も男だな。覗きとかしたことあるのか？」

「したことないよ。」

「やっぱり雪那さんは真面目な人です。」

彼は

「したことないよ。しようとしたら体がばあちゃんの手によって強制的に分裂されるから。」とは言えずに黙ってしまった。

五時間目の予鈴がなり、結局その場にずっといた留美子は立ち上がる。

「芹奈さん、帰りましょう?」

「あゝあたい、今日は体の調子が悪いからこのまま保健室に行ってくるって先生に伝えておいてくれ。」

「え、それなら私も一緒に行きましようか?」

「いや、いい。そこまで心配しなくて大丈夫だからよお。」

そういつて芹奈は追い出すような感じで留美子を学園長室から追出したのであった。

「具合が悪いなら早く保健室にいったほうがいいんじゃないのかな?」

雪那はそういつて芹奈の学習道具を片付け始める。その手を、芹奈が止めたのであった。

「いいって!今日の五時間目は自習だし、先生はこねえ。ここで雪那に教えてもらったほうがはかどるってもんだ。」

「でも、柏木さん・・・」

そう雪那が言うとともに不満そうな顔になったのであった。

「おいおい、柏木さんって・・・あんた・・・まるで他人みたいじゃないか。あたいのことは芹奈って呼んでくれよ。仮にも、あんたより学年は下だ。」

そういう芹奈だったのだが、なんだかおばさんくさいところがあるなあと芹奈を見ながら思っていたのであった。

「・・・まあ、やっぱり芹奈って呼び捨てで呼ぶのはどうかと思うから芹奈ちゃんと呼ばせてもらおうよ。」

「ちゃん付け・・・なんだかなめられているような気がするねえ。」

実際、なめるも何も自分から学年が下だと言ってきたのだが。い

や、本当のところ彼女はダブっているので歳は同じなのだが……

「コホン、実際は芹奈ちゃんは留年していたりしてね。」

「ぶえ！何故それを……」

「あ、冗談だったのに本当だったの？」

「……………」

結局、五時間目が終わるまで芹奈は雪那と話しながら勉強をしていたのである。しかし、思った以上に勉強ははかどったのだった。

芹奈は立ち上がり、道具を片付ける。

「はあ、意外とすすむもんだなあ。この前先生が何で、あんなことを言っただのか理解できたよ……………」

「そう、それならよかった。僕としても教えてよかったよ。」

さすがに一年前のことだったので雪那も忘れていたりもしたのだが教科書を読んだりして思い出したのであった。

「じゃ、あたいはこれで教室に戻るよ。雪那もがんばりなよ？」

「ああ、また何かあったらおいでよ。僕がいないときには奥の部屋で静かに待っててくれると嬉しいな。」

あまり引つ掻き回されればここではいえないような本がごろごろ……………ではないが、二冊ほどは出てくるかもしれない。

「あたいが静かに待っててられると思うのなら、きちんと隠しておくことだね。」

「……………君が来たら速攻で戻ってくるよ。」

冷や汗を流しながら雪那は芹奈を見送ったのであった。

次の日のお昼休み、芹奈から再び貰った新聞に眼を通して驚愕した。

「……………！！！！」一年生の二人組、あの学園長室に頻繁に出入り！……つて……………君たち二人のことじゃないか……！！」

怪しい行動が最近目に付いてきていたのだろ……………とうとう、芹奈と瑠美子は目を付けられてしまったようだ。

少しだけ反省気味の瑠美子

「・・・ちよつと、気をつけないと危ないようですね。」

それに対してあっけらかんとしている芹奈

「大丈夫、大丈夫。怪談のことについては関係ないと思うぞ。」

対極的な二人の意見にどうしたものかと悩んでいると

「ほお、正体がばれたのかい？」

「ば、ばあちゃん・・・」

いつの間にか隣に座っている学園長に言葉も出ない雪那だったのだが・・・多くの女子学園の生徒に顔がばれてしまったら警察沙汰である。

「どうしよう？」

「いや、正直言うならここは女子学園の生徒に変装するっていうのが王道なんだけど・・・残念なことに雪那では無理だろうな。だから、極力手助けをしないように・・・いや、それならば余山と柏木には雪那の敵になってもらう。」

「敵？」

二人の女子生徒が新聞部の本部である視聴覚室にやってきた。

「お、噂の二人がようやくきたか・・・」

「ええ、そうですね。これも、新聞のおかげですね、部長。」

ぐるぐる眼鏡の部長に腕利きそうな副部長・・・

「あゝえゝとだな、あたいたちもおたくらと同じで・・・」

「怪談を研究してたんです。ほら、そろそろ夏ですよね？だから、他校の友達に話して聞かせようと調べてたんです。ですから、私たちも新聞部に入れてもらいたいんですけど・・・」

雪那は緑茶を学園長と飲みながら将棋をしていたのであった。

「・・・あの二人、大丈夫ですかね？」

「大丈夫じゃろ。ただ単に、入部しにいっただけだからな。」

「ええ、瑠美子ちゃんなら大丈夫ですけど・・・芹奈ちゃんがへま

をしないか心配です。」

「それなら、見に行ってくればよかう？」

「残念ですけど・・・もしも、そこで僕の存在がばれたら大変じゃないんですか？」

「ほれ、王手じゃ・・・。」

「・・・。」

「今日の晩飯は雪那のおごりじゃな。」

話しこんでいたのか知らないが、雪那の王は気がつけば周りを敵兵に囲まれていたのであった。いや、一生かかってもこの人には勝てないだろう。

「いやあ、新入部員が二人も増えてよかったよかった。」

暗い夜道をぐるぐる眼鏡をかけた新聞部部长さんが歩いていて・

・と、その足が急に止まる。目の前には不良たちが円を作ってタバコを吸っていたからだ。

「・・・。」

危険なことにはさすがに首を突っ込んだら危ないと知っている部長さんは回れ右をしたのだが・・・目の前にいつの間にも現れたのか知らない人間がいた。

「ははっ、それでよあ、そのときのバイクが・・・」

気がつけば後ろにも不良がたむろっていたりもしていた。万事休すのこの状況に部長さんは心の中で決意をした。

「・・・うん、黙って走って通り過ぎればダイジョブ！だよな。」

そういつて走り出す部長だったのだが・・・

「お、可愛い子じゃね？」

「今更あんなぐるぐる眼鏡のどこが可愛いんだよ？」

「俺は好きだぜ？しかも、俺が前から目をつけていた噂の学園の新聞部部长さんだぜ。あの子、眼鏡をはずすとキュートなんだぜ。」

「え、まじ？」

隣を走っていた部長だったのだが、あっさりと腕を掴まれてしま

った。

「なあ、部長さん・・・俺たちと遊ばない？」

晩御飯は雪那のおごり・・・ということで上機嫌の学園長と共に雪那はあるいていた。

「ばあちゃん、そんなにおごってもらったことが嬉しいの？」

「違うぞ、賭けにかかったことが嬉しいんじゃないの？・・・それより、雪那、あれを見てみる。」

唐突にそう告げる学園長の指差す方向を雪那も見る。

「・・・不良に女の子が絡まれてるな。」

「そうですね。あの制服はばあちゃんのところの生徒です。」

「雪那、いつて助けて来い。恋に発展するかも知れんぞ？」

「・・・それはいいとして、とりあえず助けてきます。」

雪那はそういつて闇夜に白衣をはためかせて時空を裂いたのであった。

昼休み、雪那の元に眼をぎらぎらさせている瑠美子、芹奈がやってきた。

「こら、雪那！人がお前を助けるためにはいったことを忘れたのか！」

「そうです！これは何ですか！」

突き出された学園新聞には白衣をはためかせて不良を木刀で叩いている雪那の姿があった。それを見て雪那は驚いている。題名は“かつこいい白衣の学生！”

「嘘・・・」

「部長さん、雪那にインタビューまでしてるぞ！学園長の孫だつてことまでしゃべってるじゃないのかよ！」

「そうです！これはなんですか！」

どうせ一般生徒だろうとおもって雪那は調子に乗ったのである。

あと、雪那の写真の右下部分に映っている生徒が自分が昨日助けた

人物で新聞部長だということに気がついた。

「しゃ、しゃべったのは・・・ほら、てつきり・・・関係ない人か
と思って・・・。」

「でも、顔を知られてるんだから今度ここで顔を見られたら一発で
終わりだぜ?」

「そうです! そうしたら雪那さんは終わりですよ! 破滅ですよ!」
うぐぐと唸っている雪那たちのところへ、ノックの音が聞こえて
くる。

「すみませーん、学園長先生! ちょっと用事があつてきました!」
その声をその場で知らないものはいなかった。何故なら、雪那は
昨日助けたばかりだし、他の二人は部活の先輩にあたる人物だった
からである。

「じゃ、じゃあ・・・二人とも・・・なんとかごまかしておいて
ね。」

雪那はそういつてさっさとその場から逃げ出したのであった。痺
れを切らしてあけてしまった部長がもうちょっとはやくあけていた
ら彼女は雪那の姿を見ることができただろう。

瑠美子と芹奈は振り向いて不思議そうな顔をする部長に愛想笑
いをしたのであった。

七、調子に乗りやすいという言葉が似合う男？（後書き）

さて、このたびのお話でまたまた、新キャラらしき人物が出てきました。今のところ名前が決まっていませんが、皆さんの脳内に残るような名前にしたいと思います。

八、片付けとシチューが似合う男？

八、

「へえ、それじゃあ二人は学園長先生のお孫さんを知っているんだね。」

新聞部の部長はほかの二人の部員の前でお茶を飲んでいた。

ここが、学園長室ということを知つての狼藉だろうか？ここで、無断侵入の上にくつろいでしまうことは雪那だったら生きているのに地獄にいけるといふ矛盾した事象が発生してしまうくらいなのだ。つまり、このことがばれてしまったら新聞部の部長は危ないのかもしれない。当然、この学校の生徒ということではそのときは雪那が彼女を守るために出勤しなくてはいけないので彼も当然のように危険にさらされるということである。

「え、ええ・・・実は・・・彼とお友達でしてね、それで・・・」

「そうなんです！あたいたちは彼と友達なんです。」

必死になつて説得をしているようだったのだが、これだけでは押しが弱い。もう少し、彼の立場をよくするべきではないかと彼女たちは思った。

「・・・部長、実はですね・・・この学園、来年からは共学制になるそうなんです！」

「え、そうなの？それは初耳・・・」

「それで、彼は・・・その、視察というかなんと言うか・・・たまに、値たちに会いに来ているんです。もちろん、この学園長室で遊んでいたりますんですが・・・あ、そろそろ戻ったほうがいいんじゃないんですか？五時間目になりますよ！」

そういつて部長を立ち上がらせる工作員の部員たち。

「・・・そうね、私も学生だし・・・その話も詳しく調べておかないと・・・それと、今度雪那君が来たら教えてね。私、お礼がしたいからさ。」

そういつて彼女は出て行ったのであった。

「ふう、危なかった・・・」

「しかしまあ、雪那の野郎も節操ねえな。」

「失礼な！誰が節操ないだつて？僕のどこが節操ないんだ？」

いつのまにか隣に現れている雪那にさしも驚きもせずに二人はその場に座り込む。

「雪那さん、これからどうするんですか？」

「嘘までついちまったぞ・・・。」

「わかった。最高権力者である私がなんとかしよう。」

いつの間にか現れた学園長に留美子は驚き芹奈は目をまん丸にしていいて雪那は異次元にその姿を消したのであった。なぜなら、天井から降りてきたからだ。忍者？

「・・・いい加減、雪那がこのままでは私も面倒だからな。ここはこの学園を共学制の学園にしよう。もちろん、雪那がいるときだけはな。」

そういつて再び消えていった生徒会長に三人はため息をついたのであった。そこへ、扉がノックされる。見事なタイミングである。

「・・・氷ですけど？学園長先生はいますか？」

「あゝ氷かよ。勝手に入れ。」

芹奈がそんなことを言ったので氷ははいってきたのであった。

「・・・二人とも、こんなところで何をしているんですか？」

「・・・ええとだな、雪那のお世話・・・じゃなくて、雪那の尻拭いだな。」

そういつと隣の留美子もそれに習うようにして首を上下に振る。

「・・・尻拭い？」

「ええ、雪那さんが新聞部部長を助けたことはいいいのですが、少々、調子というサーフボードに乗ってしまったんです。顔つきでほら・・・」

そういつて新聞を見せる芹奈と留美子。新聞を見て氷の表情が鋭くなる。

「・・・この学園の生徒会長としてお礼を言いますが、一個人の私の意見ではやめてほしいですね。これでは、ただの行き過ぎた成敗にしか思えません。」

「なるほど・・・そういう見解もあるのかあ。」

「・・・生徒会の権利として、この新聞を断念するようにと新聞部部长には告げておきます。雪那さん、今後は気をつけてください。」

そういつて氷は二人も連れて出て行ったのであった。その後姿があまりにも堂々としていたので雪那は

「かつこいいい！あれが漢の背中つてやつか！」と感激していたのであった。

放課後、自室で刀の手入れをしている雪那の耳にノックの音が聞こえる。

「雪那殿、リデリアだ。」

「あゝリデリアね・・・どうぞ。」

「それでは、失礼・・・」

腰に木刀を装備しているリデリアが雪那の部屋にはいつてくる。

「・・・邪魔かと思ったが、入室させてもらっ。」

「いいよ、気にしないで。お茶淹れるからそこでまって。」

雪那は隣の部屋にお茶を淹れに行ったのでリデリアは雪那の部屋をぐるりと見渡していた。

雪那の部屋は畳敷きでとても落ち着いている。壁には『窮み』とかかれた紙が額に入って飾られていたりもするのだが、簡易ベッドの近くにはプラモが飾られている。ちゃっかりそのプラモの手には刀がつけられていたり、部屋の隅には木刀が飾られていたりもする。やはり、そこはその筋の血が流れているのだろう。

「・・・ふむ、やはり雪那殿は拙者と同じような趣味を持っているんだな。」

そう思うとうれしくなるリデリアなのだが、彼女の部屋と雪那の部屋では同じところは畳敷きということだけだろう。彼女の部屋が

きれいになるには少々時間（約半日）を要する。

「さ、もって来たよ。」

「かたじけない。」

茶菓子（これは学園長のおやつである。）とお茶（これも学園長の私費で買ったものである。）を所持して彼は戻ってきた。

ほのぼのとした放課後の時間を終えて、リデリアは雪那になにげなく尋ねた。

「雪那殿、拙者は貴殿が新聞に写っていたところを見たのだが・・・どうやら、この学校に転校することになったらしいな？新聞部の部長が放送室をのっとって五時間目に放送していたぞ。」

それを聞いた雪那は食べていた茶菓子をのどに詰まらせてお目目を白黒・・・この場にリデリアがいて背中をたたいてくれなかったら死んでいたかもしれない。

「・・・本当にそんなことになっていたのか・・・」

「しかし、顔を見せるなど・・・さすがにそれはやばいのでは？」

「しょうがなかったんだ。つい、調子に乗っちゃって・・・」

「貴殿の性格であろう・・・それより、拙者はこれから買い物に行くのだが・・・ついてきてくれないか？」

今ではどこか言葉がおかしいリデリアなのだが、そこは雪那がなんとかするだろう。

「・・・わかった、リデリアについていこう。」

立ち上がって財布をぽっけに突っ込んでいる雪那の後姿を見ながらリデリアは微妙に不満そうな顔をするのだった。

「むう、雪那殿、ほかの女性には“ちゃん”や“さん”をつけるのに今では拙者を呼び捨てにするのはなぜだ？」

「え・・・リデリアはやっぱり“ちゃん”付けで呼んだほうがいいのかな？確か、僕より実は一歳年下で小さいころの知り合いだったから妹感覚だったんだけど・・・まあ、不満ならきちんと“ちゃん”付けで呼ぶよ。」

「うむ、それがいい。」

どこかえらそうな態度だったのだが、雪那は昔からだったかなと思つて考えを打ち切つたのであつた。

「リデちゃん、今日は何を作るの？」

街中を二人で歩きながら雪那は隣を歩いているリデリアに話しかける。

「リデちゃん・・・まこと、すばらしい響き・・・このリデリア、生涯に悔い無し！」

感動に打ちひしがれているリデリアの肩をゆすつてみるのだが、彼女は顔を真っ赤に染めてなにやらぶつぶつとつぶやいていた。ちよつと危ない人間のできあがり。

「・・・はあ、なんだか近頃女の子と話す機会は多くなつてきた気がするけど、変なやつしか会わないな・・・。」

それは失礼なのだろうが、しょうがないことである。実際、隣は危ない人間である。

「雪那殿、今日はカレーを作ろう！」

「カレー？わかつた。」

「材料は愛情にカレー粉だけで十分だ！後は、そこらの草で作る！愛情さえあれば、何でも作れるからな！」

「・・・ほかの具材もきちんと買おうね？」

拳を天に突き上げて歩いているリデリアに対して雪那は地を見下ろしながらそつとため息をついたのであつた。

スーパーにやってきた二人は普通にジャガイモやにんじんを買い（途中、リデリアはモザイクがかかった食材を手にも雪那の元にやってきた。）帰路についていた。

「雪那殿、今日は拙者の家に学園長殿が来ているそうだ。それで、貴殿も来るようにといわれたのだ。」

「・・・それなら、しょうがないな。」

上は偉い人、自分より下の人は下の人・・・そういう関係なので反

抗は一族全体に対して宣戦布告であるといっても過言ではない。

「お前のものは俺のもの・俺のものは俺のもの・まあ、しょうがないことなんだろうなあ。でも、リデリアの実家は苦手なんだよなあ。」

「何、拙者の家とはいっても実家のほうではない。気兼ねなく拙者が作る料理を楽しんでいってくれ。」

彼女がどの程度、料理のスキルを持っているかそこはかとなく漠然とした不安を腹に抱えておなかいっぱいである雪那は彼女のスカートの中から短く伸びている竜の尻尾を眺めながら再びため息をつけていたのであった。

リデリアの家にやってきた雪那だったのだが、そこがアパートの一室でとても汚いことを知った。

「・・・足の踏む場、ないよね？」

「大丈夫だ。踏んで壊れるものはおいていないからな。落ちているものはごみだけだ。」

そういつてのしのしと靴のまま上がっていくリデリアの後を雪那は追いかけたのであった。

「む！これは学園長の手紙・・・雪那殿、貴殿宛のようだ。」

渡された手紙には『我が孫 雪那へ』と書かれていたのであった。「拙者はあちらで料理をしてから雪那殿はその手紙を見ているといい。じゃ、後ほどおいしいカレーとともに食そうではないか。」

台所に消えた彼女を見送って雪那は手紙を開ける

『雪那、私はリデリアの家にはじめてきたのだが、汚すぎてはいることができません。私が帰ってくるまでにどんな手段を使ってもかまわないからきれいにしておくように！できていなかったら覚悟してもらおう。』

学園長はどうやらきれい好きだったらしいのだが、リデリアの部屋がここまでひどいと何をしてても無駄だと悟ったらしい・・・

「やれやれ、僕が結局やらないといけないのか・・・」

どこから取り出したビニール製の手袋を装着し、頭にバンダナ、口にマスクをして彼は早速転がっているプリンの容器に手を伸ばしたのであった。

時間帯はすでに深夜・・・ようやく片付け終わった部屋を前にして雪那はため息をついていたのであった。

「つ、疲れた・・・」

すべてのごみは仕分けして近くのゴミ捨て場におかれてきたのであった。

「雪那殿、ご苦労・・・」

なべを持って現れたリデリアにちよつとだけ非難のこもった視線を浴びせて雪那はため息をまたついた。

「さ、シチューができたからともに食べようではないか。」

「・・・もう、なんでもいいよ。」

いつの間にか白くなっているなべの中身を見ながら疲れきっている雪那は半ばやけ食いでなぜか味のしないシチューを必死に口の中に運んでいったのであった。

「・・・ん・・・」

「・・・すー・・・」

寝返りをうつと、そこにはリデリアの寝顔があった。その寝顔をまじまじと眺めて雪那はぼーっと考えて体を起こしてみた。どうやらここはリデリアの部屋のようだった。雪那はしばし、部屋の中をきよろきよろしてなぜ、自分がここにいるのか考えたのだった。

「・・・ああ、そういえばカレーを食べにきたんだったな。」

そういつて再び横になって目をつぶったのであった。

「・・・ふあ・・・明日もきちんと・・・起きないと・・・な？」

ようやく覚醒し、雪那の背中には冷や汗が・・・

「ま、まさか・・・一線、越えちゃったか？いや、リデちゃんが・・・そんなことはないな。」

リデリアの顔がある前にはきちんと『立ち入り禁止！』と書かれた刀が床に突き刺さっている。つまり、あちらにはその気はないわけだ。

「よかった。」

そういつて雪那は立ち上がって部屋を出ようとしたのだが・・・そこが自分の部屋だということによりやく気がついた。勘違いをしていたようである。

「・・・まあ、リデちゃんの寝顔でも拝んでおこうかな？減るもんじゃないだろうし・・・」

そこにどかりと腰を下ろして雪那はずっとリデリアの寝顔を眺めていたのであった。そして、そのまま目を閉じて・・・寝てしまったのであった。

朝、目を覚ますと縄でぐるぐる巻きにされていることに雪那は気がついたのであった。

九、終わりが似合う男？（前書き）

今回で終わりとなりました。

九、終わりが似合う男？

九、

満月を背に、屋上には一人の男がたたずんでいた。

そろそろ、季節も夏に移ろい変わるというのに着ている衣服はぼろぼろの白衣のようなものであった。その白衣にはところどころ、血がついており、その目は静かに閉じられている。衣服から出ている手には包帯が巻かれており、右手にはつばの無い刀が握られている。彼はどこに行くでもなく、その場にたたずみ・・・ただ、目を閉じていたのであった。

「・・・ふぁ・・・また変な夢を・・・見たなあ。」

雪那は水道で顔を洗ってそんなことを考えていた。最近になつてずっと同じような夢を見ているのだ。顔の部分がちょうど見えないようだったのだが、その姿は間違いなく自分のもの・・・しかし、雪那はこれまでそんなことをしたことが無い。寝ている間にそんなことになっているのではないことは確かなのだ。

「・・・兄貴・・・じゃないし、知り合いでもないなあ。」

何か居心地の悪いものを感じ、雪那は今日も学校の警備に当たることにしたのだった。無論、朝ごはんは自作のおにぎりである。金銭全て取り上げ立ったのだが、このたびバイト代が手にはいり塩を購入・・・彼の食卓に花を咲かせているのである。塩を勝手からというものは毎日毎日白いおにぎりを作っている。

昼休みになり、雪那は屋上に来ていた。今日は曇っていて人が来ないと思ったからである。少しばかり騒がしいこの校舎もそろそろ夏休みを迎えて部活で使用している特別教室とグラウンドぐらいしか生徒たちの声が聞こえてこないだろう。

「・・・寂しくなるなあ・・・」

そんなことを思いながら雪那は屋上の端でおにぎりを食べていた。屋上にはリディアと戦った後が修復されていないのでいまだに残っている。

「・・・そういえば、夢でも屋上に誰かいたしなあ。あれ、誰だったんだろう？」

ぼろぼろの白衣を着ている人物がいたところのほうに視線を移す・
・そこに、夢に出ていたあの人物が同じようにしてたっていた。
空が曇っているということを除けば同じ状況であった。

「・・・そんな・・・。」

雪那は立ち上がり、呆然とする。

「・・・女の子だったなんて！」

見上げるような形になっており、風が吹くたびにパンツが見えていた。

『我は血を見るもの・・・』

「そして僕はパンツを見るもの？」

『我に何かようか？』

「いえ、別に・・・。」

雪那はとりあえずパンツを見ることができたのでさっさと退避しようと思ったのだが相手が目の前に現れる。

「・・・あの、どいてください。」

『・・・そうはいかない。我を呼び出したのはお前だ。人がせつかく眠っていたのに無理やりおこしたのだ。何か、用を言うのが礼儀だとは思わぬのか？』

「そんな・・・ええと、それなら・・・あなたの存在を教えてください。この学園の制服を白衣のしたにつけているということは元はこの学園の生徒ってことですね？」

ぼろぼろの白衣のしたにはなるほど、確かにこの学園に似た衣服を纏っている。

『・・・我はこの学園の創立者の愛用していた剣だ。これでいいか？』

「ええ、結構です。これ以上面倒なことには巻き込まれたくないって僕の心が叫んでいますんでありますがとうございました。今後は二度とあなたを呼び起こすような真似はしませんので、おとなしく帰ってください。」

『・・・そうか、それならば我は再び寢床に戻ろう・・・』
そういつてその創立者の剣は姿を消したのであった。

放課後、学園長が雪那の部屋にやってきた。その顔は思案顔である。

「・・・雪那、お前に話さないといけないことがあるんだ。」

雪那は首をかしげて学園長のほうを見やったのだが、思い当たることがあったので覚悟を決める。それは、昼休みでの出来事だろうと彼は踏んでいたのだが・・・

「実は、この小説は今回で終わりなんだ。」

「・・・まじ？」

「ああ、まじ。理由は色々あるんだが・・・とりあえず、終わらだ。」

そういわれ、雪那はそわそわし始める。

「・・・そ、そんな・・・」

オチだからおちつくことができないのだろうか？この主人公は？

「えゝこれまで読んでくれてありがとうございました。また、どこかでお会いしましょう。」

九、終わりが似合う男？（後書き）

短かったかな？と思っているし、おちもあんまりうまくまとめられていないと思いますが・・・とりあえず、これにて”せつなのはざま！”は終わりです！応援してくださった皆さん、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4746c/>

せつなのはざま！

2010年10月8日15時55分発行